リバーフロントの整備を巡って

理事長
西原　巧

はじめに

リバーフロント整備センターの理事長を仰せ付かって、早くも一年が経過した。その間の我が国のリバーフロント整備をめぐる環境は、強力な世論の支持もあって、大いに改善されたように思われる。河川局、都市局を中心とする関係者の努力に心から敬意を表したい。

さて、1970年代に、ウォーターフロントの整備・開発の声がアメリカ東部を中心に起こったとき、その狙いはスラム化しつつあったニューヨーク、シカゴなど大都市の港湾地区の再生であり、活性化であった。

我が国のウォーターフロントのうち、東京湾、大阪湾などの港湾地区については、事情はある意味でアメリカの都市に酷似している。しかし、われわれが担当するリバーフロントでは、事情は少し異なっているのではないだろうか。この点は、今後十分念頭においておく必要があろう。

リバーフロント整備の背景

この10年から20年の期間の前後で生じた、我が国の河川をめぐる種々の条件の際立った変化は、私見によれば、つぎのように要約できると思われる。

第一に、昭和30年代中期以降の経済の急成長に対応するために、効率の追求に重点をおいた感があった治水事業においても、うるおいを求める国民各層の声に耳を傾ける必要が出てきたこと。

第二に、関係者の積年の努力が実って河川水質の改善が著しく、今まで河川に背を向けていた住民に、河川に対面して生活しようという気持が戻ってきたこと。(この事実は、河川の下流部において重要である。)

第三に、全国的な規模で〝ふるさと創生〟運動の高まりをみたこと。

第四に、〝一村一品〟運動に代表されるように、社会全体に画一化よりも多様化を貴ぶ傾向が出てきたこと。

以上は、もとより私見に過ぎないが、このような社会の動きがリバーフロントの整備・開発をバックアップする世論の背景にあると考えてよいと思われるのである。

建設省河川局が昭和62年度に新規事業として取上げた「ふるさとの川モデル事業」は、ふるさとである町や村の河川のあり方を、河川管理者のみでなく、学者、主婦、地方自治関係者などの広い範囲の意見を得ながら研究し、ひとつの計画にまとめあげ、比較的短期間で完成を図ろうとする事業である。

従来、ややもすれば都市の整備と河川の整備とが十分な相互調整を経ないで行われることがあったが、この事業はその点でも優れた方式であると言える。

われわれは、基本的な調査の実施と計画案の作成の段階で、ふるさとの川整備事業にタッチしており、この事業の一層の発展を願っている。

水泳教育の在り方

話題は変わるが、６月某日の新聞報道によると、衣服を着たままで相模川を泳いで横断しようとした大学生が溺れて死んだという。

酒を飲んでいた人もいたということであり、学生の側に落度があったのかも知れないが、可惜ら有為の人材を失った痛ましい事故であった。

ところで、その数日後の朝日新聞の投書欄に、興味ある記事を発見した。

それは、現在オランダに在住している子供を持つ主婦からの投書で、主題はスイミングスクールの教育内容である。

投書によると、オランダでは、衣服を着け、靴をはいたままで25メートル泳げなければ、A級の免状はもらえないのだという。

このような取決めがあるのは、この国では、水泳を学ぶ（あるいは教える）動機の第一が、水の脅威から自己の生命を守ることにあることを示すと同時に、衣服を着たままで泳ぐことがいかに困難であるかが、よく認識されていることを示すものである。

我が国にもスイミングスクールの数は多い。小学生の殆どは、一度はその門を潜ったことがあるのではないだろうか。しかし、残念ながら服を着たままで泳ぐ訓練をする学校のあることを知らない。もし、我が国のスイミングスクールの教育課程がこのことに留意して作成されていたなら

ば、相模川での事故は、あるいは防げたのかも知れない。

かつては、悪童仲間との水遊びの中で覚えるのが普通であった水泳すら塾で習うようになって、水泳のフォーム自身はきれいになったが、不測の事故に対応する教育はどうやら不十分になったようである。

続いて、こちらは週刊誌の記事であるが、魚釣りのグループ旅行でのこと、川の浅瀬で釣っていた男の子が足を滑らせて深みへ流された。アップアップしている子供に気付いた父親は、すぐに飛込んで助けようと考えた。当然のことである。しかし、その子がスイミングスクールで水泳をならい、泳げることを知っていた父親は、

「○○！泳げ！泳ぐんだ！」

と大声で励ましたのである。

それが聞こえたのだろう。その子は、覚束かないフォームながらもクロールで泳ぎだし、無事岸にたどりついたということである。

リバーフロントの整備や、ふるさとの川運動を推進する際に、われわれは水辺の危険を除くことには努力するが、不注意から川に落込んだ場合についての配慮には、あるいは、十分でないところがあるかも知れない。

リバー・フロントの整備に関係する者にとって、これらの事件は多くの教訓を含んでいるように思われる。

国際水都首長会議

7月25～27日の3日間、国際水都首長会議の名のもとに、世界26カ国から33の海岸、湖岸、河岸に立地する都市…いわゆる水都の首長が大阪に集まった。

会議の目的は、これらの都市に共通する課題の解決に資するとともに、21世紀に向けて国際的な連携を強め、豊かな社会の実現に貢献しようということである。

会議は、首長会議および4つの分野に分れる専門家会議とから構成され、最後に総括会議が持たれて、会議の成果を盛込んだ「大阪宣言」を採択するというシナリオであった。

筆者は首長会議と総括会議のコーディネータの補助の役割を当てがわれ、この会議に出席する機会を得た。討議の主題にはリバーフロントの整備に関係深いものが多かったので、以下にその概要をご紹介することにする。

出席した水都の首長は代理者を含め全部で33名、国の数は22カ国であった。我が国からは大阪の他に盛岡、仙台、京都、神戸、松江、広島の6都市が参加している。

外国からの参加都市を地域別に分けると、アジアからはバンコク、ボンベイ、上海など7都市、北アメリカからはシカゴ、サンアントニオ、トロントなど6都市、ヨーロッパからはベオグラード、バーミンガム、ウインなど10都市であり、これら3地域で参加者のほとんどを占めた。因みに、他の地域からの参加は、アフリカのカイロ、オーストラリアのメルボルン、南アメリカのサンパウロの3都市を数えるのみであった。

なお、参加都市の顔ぶれには、ベオグラード、ブタペスト、レニングラード、上海など共産圏の諸都市が含まれており、進行中のペレストロイカとの関連で一般の耳目を惹いたようであった。

会議の冒頭に、西尾大阪市長、作家杉本苑子氏、およびアイオワ水理研究所長のジョン・F・ケネディ氏による基調講演があったのち、各都市の首長が、各々の都市の抱える問題点を含めた概況の報告を行った。

その内容はそれぞれに興味深かったが、最後の総括報告でコーディネータの岩佐教授が述べたように、各都市はその置かれた地理的、自然的条件や歴史的、文化的条件を生かしながら、「水と緑に恵まれた都市環境」の整備に努力しつつあるようである。

たとえば、英国中央部の都市バーミンガムは、20世紀初頭まで内陸水運で重要な役割を果たした「運河」周辺の景観の保全を中心に、都市計画を進めている。この都市の例は、京都でわれわれが直面している、鴨川の改修と景観保全との相剋の問題と同質であると言えるかも知れない。

一方、神戸はダイナミックな埋立て事業を背景にした都市造りについて報告した。これは、大阪や、今回の会議には出席しなかったが横浜などの目指している方向と、そうして、多分、シカゴやニューヨークなどの諸都市のウオーターフロントの再開発目標と、同一のものを含んでいるように思われた。つまり、より多くの人口の定着を狙った土地開発を指向していると思われるのである。ここでは、都市のアメニティを高めるための公園は、誰でも楽しめるパブリック・スペースとしてより、むしろディズニー・ランド的施設として計画されているようである。

米国のウオーターフロントの再開発の眼目の一つが、パブリック・アクセス…誰でも水辺に近付けること…の回復にあることは、よく知られている。これに比べて、前述の都市のそれは、パブリック・アクセスに対する取組みがあるいは不十分かと思える。

会議の総括に際して、岩佐教授は水都を

(1)人口急増都市
(2)都市基盤整備都市
(3)成熟都市
の３つのカテゴリーに区分した。多分この成熟都市のカテゴリーに属するベオグラードの首長が
「水辺、緑などの魅力を持たない都市は21世紀には住民から見捨てられるであろう」
と述べたことが印象に残った。ヨーロッパ既成都市のウオーターフロントの整備は、かなり差迫った重要性のものとして認識されているようである。

地球温暖化の影響

われわれは、世界の水都が近い将来において直面するかも知れない大きな問題の一つに、地球の温暖化に起因する海面の上昇があると考えている。

国際水都首長会議でもこの点についての論議が行われるものと想像していたが、実際には、ある一つの都市が化石燃料の多使用による地球温暖化にふれるに止まった。

いうまでもなく、この会議は都市計画(City planning)のうちの水と緑の整備に重点を置いている。そうして、都市生活に不可欠の暖冷房や、都市を支える産業の問題を取扱わない以上、これは、あるいは仕方のないことであったかも知れない。

この国際水都首長会議は、３年以内に第２回の会合を持つようであるから、次回以後に期待することにすべきだろう。

国際水都首長会議テーマ

基調講演
1.「21世紀の水都大阪」
　西尾正也(大阪市長)
2.「川を止めた男」
　杉本苑子(作家)
3.「巨大都市における二つの水問題ー
　水供給と汚水処理」

専門家会議Ⅰ
テーマ:「水から都市をまもる」
1. 洪水防御対策
2. 高潮対策
3. 地盤沈下対策

専門家会議Ⅱ
テーマ:「水質の確保と水利用の多様化」
1. 水質保全
2. 水処理対策
3.水資源の確保と利用
4. 海域環境

専門家会議Ⅲ
テーマ:「水空間の再生と水際環境の創造」
1. ウォーターフロントの開発
2. ウォーターフロントのデザイン」

専門家会議Ⅳ
テーマ:「緑の保全と創造」

会議参加都市

都　市　名	国　　名
バンコク	タイ王国
ベオグラード	ユーゴスラビア社会主義連邦共和国
バーミンガム	グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国
ボンベイ	インド
ブダペスト	ハンガリー共和国
カイロ	エジプトアラブ共和国
シカゴ	アメリカ合衆国
ハンブルグ	ドイツ連邦共和国
クアラルンプール	マレーシア
レニングラード	ソビエト社会主義共和国連邦
マドリード	スペイン
マニラ	フィリピン共和国
メルボルン	オストラリア
ミラノ	イタリア共和国
モントリオール	カナダ
ニューオーリンズ	アメリカ合衆国
パリ	フランス共和国
サンアントニオ	アメリカ合衆国
サンフランシスコ	アメリカ合衆国
サンパウロ	ブラジル連邦共和国
ソウル	大韓民国
上海	中華人民共和国
シンガポール	シンガポール共和国
トロント	カナダ
ベニス	イタリア共和国
ウィーン	オーストリア共和国
盛岡	日本
仙台	日本
京都	日本
神戸	日本
松江	日本
広島	日本
大阪	日本